

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25285182

研究課題名(和文)学校教育場面における社会的絆の形成と回復をめざす支援の検討

研究課題名(英文)Effects of Social bond and it's resolving for high school students in their school life

研究代表者

庄司 一子(SHOJI, Ichiko)

筑波大学・人間系・教授

研究者番号：40206264

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は学校適応や人との関わりに困難を抱える生徒への教育場面での支援を行い、人との安心できる関係づくりを進め、効果を実証することを目的とした。Hirschiの社会的絆理論に着目し、絆が生徒の学校適応、対人関係の変容と回復に与える影響を検討した。

中学生を対象に社会的絆尺度の調査を行った結果、社会的絆は教師・友人・家族への愛着、巻き込み、規範から成り、愛着と巻き込みは学校適応、対人的構え、信頼感に有意な正の影響を及ぼしていた。社会的絆得点が低い生徒は対人関係に傷つき体験を持ち、学校を休みたいと思っていた。生徒への支援とつながりづくりから支援の有効性、関係者の連携、教育環境の重要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to demonstrate effects of support for students who had difficulties in school adjustment and interpersonal relationship by supporting them to promote skills in developing relationships. Based on Hirschi's social bond theory, a social bond scale was developed and examined its effects. The questionnaire was filled by middle school students. Factor analysis revealed 5 factors, attachment to teachers, peers, and family, involvement, and belief. Attachment and involvement have significant positive influence on their school adjustment, peer relations, and sense of trust. Students with low scores on all the subscales appeared to indicate that they may have had negative experiences in interpersonal relationship and also indicated that they wish to be absent from school. The effects of supporting students' adjustment and fostering social bonds through collaborating among school staff and creating supportive educational environment were considered.

研究分野：教育心理学，学校心理学，発達臨床心理学

キーワード：社会的絆 社会的絆尺度 学校適応 対人関係 絆づくり 学校教育 多様な援助ニーズ 適応の困難

1. 研究開始当初の背景

人は何気なく日常生活を送っているが、それは様々なものに支えられている。特に親子や家族の情緒的絆は学校に通う児童生徒にとって日常を支える最も重要なものの一つである。しかし、近年の児童相談所における虐待相談対応件数の増加は、乳幼児期を通じた「親子の絆」の形成において様々な問題状況があることが懸念される。庄司(2006)によれば乳幼児を子育て中の母親の40%が「虐待不安」を抱えていることが報告されており、虐待予備群、育児不安群の割合は決して少なくないと考えられる。亀口(2011)は「日本の家族にも底知れぬ変化が生じている」と指摘する。

学校教育臨床や学校心理学の領域でも、夫婦間の葛藤や不和、離婚問題などを抱えた場合、子どもの発達・教育上の危機状況としての対応が求められることが指摘されている(石隈、1999)。実際、学校教育の中で生徒の家庭環境の様々な問題や困難状況から、保護者との連携の困難さは教師の悩みとして報告される(諸富、2012 ほか)。親自身が親子関係や家族関係に葛藤を抱えながら子育てすることと子どもの学校不適応との関連は否定できない。

一方、児童生徒の自殺は後を絶たない。いじめに関する生徒への調査では、いじめを受けた時、教師に援助を求めない理由は「教師に相談しても解決しない」「相談したことで自分の印象が悪くなる」であった(水野、2003)。生徒のこのような認識は、いじめ被害への援助を阻ませ、同時に生徒の孤立感、孤独感、無援感を強めるものとなっている。

このように子どもにとって人間関係の基礎となる親子関係、家族関係に大きな変化が生じており、さらに学校での教師との関係、仲間との関係が信頼できず、表面的で不安定であることは子どもが安心して他者と関わり、安定した人間関係を築いて学校生活を送ることが困難なことを意味する。現代社会の学校においては、どのような学校でもこれは起こりうるが教育困難な状況にある学校ではこの問題は一層顕著に表れる。

ところで、Hirschi(1969, 1994, 2002)が提唱した社会的絆の概念は、非行の内的抑止要因としてとらえられ実証されてきた。斉藤(2002)は教師への愛着の非行への抑制効果を示し、山内(2004)は社会的絆の主な機能に「感受性」と「規範の取り入れ」の二つをあげた。また那須・菅野(2007)は「社会的絆」の理論を学習理論と関係論から再考し、発達段階でその機能が変わること、適応的な行動と反社会的な行動も状況に応じて変容するとしている。

近年、「聴く」ことに関する研究が行われるようになりその重要性が認識されるようになってきている(鷲田、1999; 一柳、2008; 川畑、2009, 藤原・濱口、2011)。庄司ほか(2010, 2011, 2012)は、親が自己を語り、人の

話に耳を傾けることによって親自身が変容し、子どもとの関係、育児行動が変容することを示した(庄司ほか、2010, 2011)。この聴きあう関係を通して、仲間からの受け入れ体験、参加者相互の情緒的結びつき、親自身の自己のふり返りが生じ(Shoji et al., 2010, 2012)、聴きあう関係を通して、安心と安全が保障され、受容体験、自己を語る体験が参加者の変容につながることを示唆された(Shoji et al., 2012)。こうしたグループ体験を通じた参加者の変容は、Hirschi の「社会的絆」理論から理解できる。メンバー相互の情緒的結びつきは「親子の絆(Bowlby, 1969)」と対比させ「社会的絆」ととらえられる(庄司ほか、2010)。

以上より、現代の子どもたちの学校不適応の問題の背景に家族や学校での人間関係の問題があると考え、これを「社会的絆」ととらえ検討する必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、庄司ほかの子育て支援の成果を元に「社会的絆」を理論的枠組みとし、学校教育において様々な対人関係上の問題、適応上の困難を抱える生徒、さらには教育困難校において悩みを抱える生徒に対する支援を通して、社会的絆の形成のプロセス、さらに絆の形成が生徒のつながりの回復、学校適応にどのような効果をもたらすかを明らかにすることを目的とする。

具体的には次の4点を検討した。

研究1(調査研究): Hirschi(1969)の社会的絆の理論を理論的枠組みとし、社会的絆の内容と構造を検討する。

研究2(調査研究): 社会的絆の発達の検討と関連要因との関係を検討することを目的とする。具体的には社会的絆の発達の变化、社会的絆と親子の絆、過去の対人経験の認知の関係、さらにこれらが学校適応、対人関係に及ぼす影響を検討する。

研究3(支援と支援の効果の検討): 社会的絆形成のための支援と形成のプロセス、その効果を明らかにすることを目的とする。

調査の結果に基づきクラスの実態に即した支援計画を立て、絆の形成の支援を行い、実施後、クラスへの効果、個別支援の効果を検証する。また平成25年度～平成28年度まで、学校現場における学生ボランティアによる生徒へのサポート活動を実施し、社会的絆の形成と社会的絆の形成が学校での対人関係、学校適応にどのような影響を及ぼすかを明らかにする。

研究4(絆形成と支援モデルの提示)

以上により、社会的絆形成のモデルを示す。

3. 研究の方法

研究は目的に合わせ、三つの方法が用いられた。

(1) 社会的絆尺度の開発と検討

102 名の中学生を対象に予備調査を行い、

社会的絆のイメージを調査した。その結果は Table 1 に示されている。首都圏の公立中学校 3 校、912 名を対象に各校とも学級単位での調査を実施した。内訳は、中学 1 年生 358 名（男子 192 名、女子 166 名）、中学 2 年生 357 名（男子 163 名、女子 194 名）、中学 3 年生 197 名（男子 94 名、女子 103 名）であった。

調査は Hirschi (1969) を参考に、家族・教師・友人への愛着、コミットメント、インボルブメント、規範観念・規範意識の 5 つの概念について、それぞれ 5 項目、計 30 項目を作成し、「まったくあてはまらない(1)」～「よくあてはまる (5)」の 5 件法で回答を求めた。調査時期は平成 25 年 12 月であった。

(2) 社会的絆の関連要因の検討

社会的絆と関連する要因を検討するため学校適応感(大久保, 2005), 対人的構え(佐藤, 1993), 信頼感(天貝, 1995), 親への愛着(佐藤, 1993), 友人関係満足(高坂, 2010), を測定し、社会的絆との関連・関係を検討した。

(3) 実践支援

社会的絆形成のための支援を学校教育現場で行った。具体的には生徒支援のために毎年ボランティアの大学院生 10 名程度が交替で週 2～3 回学校を訪問し、学校の相談室の隣の部屋(キャンパスエイド室; CA 室)で午前 10 時から午後 4 時頃まで滞在し、授業の合間やお昼休みに部屋を訪ねる生徒の悩みを聞き、相談事に乗り、生徒の学校生活を支援した。相談や雑談にやってくる生徒は一日およそ 7、8 名～15 名であった。

生徒の学校生活での変化を学生の面接記録から考察した。

最終的に、社会的絆形成のための生徒支援モデルの検討を行った。

4. 研究成果

(1) 社会的絆の尺度作成と因子分析

社会的絆の尺度全 30 項目について主因子法プロマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量等を考慮して再度分析した結果 5 因子が抽出された(Table 1)。絆の下位尺度は互いに有意な相関を示していた。

次に社会的絆の学年、性差を検討した。

「家族への愛着」、「巻き込み」、「規範観念」は交互作用が有意であった。「家族への愛着」では、男子は 1、2 年が 3 年より得点が高く、女子は 2、3 年が男子より高かった。「巻き込み」は、男子では 1 年の方が 2、3 年より得点が高く、3 年では女子の方が男子より高かった。「規範観念」では、男子において 1、2 年の方が 3 年より得点が高く、2 年生では男子の方が女子よりも得点が高かった。

「教師への愛着」では学年差が有意であり、1 年の方が 2 年より得点が高かった。「友人への愛着」では性差が有意で、女子の方が男子よりも得点が高かった。

Table 1 社会的絆の因子分析結果(プロマックス回転)

	F1	F2	F3	F4	F5
第1因子 教師への愛着 ($\alpha=.86$)					
4 私が困ったり悩んだとき、先生は相談にのったり手助けしてくれる	.88	.04	.01	-.19	.06
6 先生は私に関心を示し、私を理解してくれる	.86	.00	.02	-.01	-.06
3 私が困ったときやわからないとき、先生に相談したいと思う	.72	-.07	.12	-.04	.03
18 先生は私の考えや行動を認めてくれる	.70	.03	-.08	.20	-.01
10 先生は先生自身のことも話してくれる	.59	-.03	-.04	.11	-.03
第2因子 友人への愛着 ($\alpha=.85$)					
24 友だちは私に関心を示し、私を理解してくれる	.02	.80	-.03	.01	-.02
14 友だちは私が困っている時、話を聞いたり相談にのってくれる	.03	.77	.02	-.08	-.05
22 友だちは私の考えや行動を認めてくれる	.00	.74	.07	-.02	-.01
20 友だちは、困ったとき、私に相談してくれる	-.06	.72	.03	-.01	-.03
12 友だちは私と一緒に話をしたり、遊んだりしてくれる	-.02	.60	.04	.03	.06
第3因子 家族への愛着 ($\alpha=.85$)					
5 家族は私が困っているとき、話を聞いたり相談にのってくれる	.09	-.03	.85	-.11	.02
30 家族は私に関心を示し、私を理解してくれる	-.01	.06	.74	.09	.03
9 家族は私の考えや行動を認めてくれる	.04	.02	.71	.05	-.02
21 家族と一緒に話をしたり、でかけたりする	-.07	.07	.60	.18	-.03
2 家族は私がどんな学校生活を送っているか(勉強や友だち、部活動のことなど)を知っている	-.03	.03	.55	-.02	.08
第4因子 巻き込み ($\alpha=.64$)					
17 学校の役割や委員会活動(係)を一生懸命やっている	.07	.03	-.08	.64	.05
16 自分の将来を考えて、今どうすべきか考えて行動している	.03	-.13	.21	.53	-.15
23 学校行事を一生懸命やっている	.07	.20	-.17	.51	.10
15 部活動や学校外のスポーツをがんばっている	-.08	-.03	.05	.46	-.07
25 学校の勉強や部活動で良い成績を取りたい	-.08	-.06	.05	.45	.14
29 学校や学校外で勉強をがんばっている	.05	-.03	.09	.43	.01
第5因子 規範観念 ($\alpha=.80$)					
11 学校の校則は守るべきだと思う	.02	.01	.02	.04	.84
1 ばれなければ校則に反する行為をしても問題ないと思う(R)	-.02	-.06	.04	-.03	.78
因子相関行列					
F1	1				
F2	.40	1			
F3	.48	.45	1		
F4	.51	.50	.49	1	
F5	.37	.16	.25	.49	1

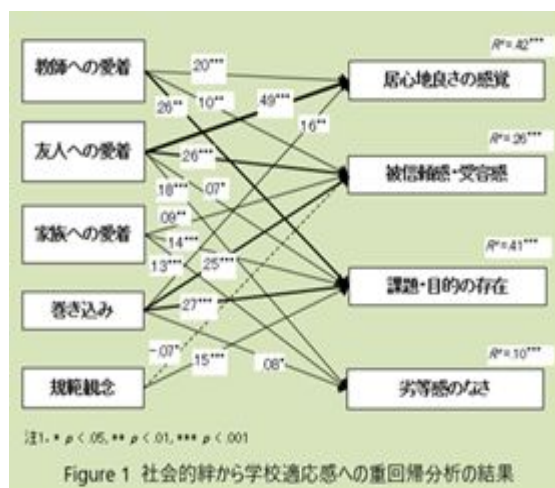
(2) 社会的絆と関連要因の検討

(2) - 1 相関分析

社会的絆と他の尺度の関連を相関を算出して検討した。その結果、ほとんどの下位尺度間に中程度以上の有意な相関が示された。特に社会的絆は学校適応感、信頼感尺度と高い相関を示した。

(2) - 2 重回帰とクラスター分析

社会的絆の学校適応感への重回帰の結果は Figure 1 に示されている。相関でも示されたように、愛着から学校適応に有意な回帰が示され、また巻き込みからも同様に有意な回帰が示されている。



次に下位尺度でクラスター分析した結果から対象者は5つのタイプに分類された。クラスター3は下位尺度得点も相対的に高く、クラスター2はどの得点も低く、ピリーフが低

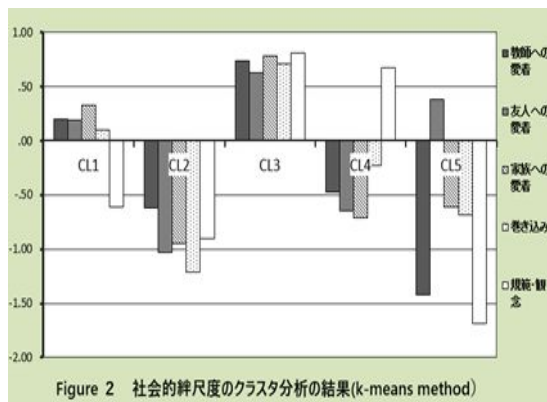


Figure 2 社会的絆尺度のクラス分析の結果(k-means method)

(3) 生徒支援の実践とその効果

(3) 1 中学校における絆づくりの支援

中学校1年生の1学級を対象として、生徒間の絆づくりを2週間の間に3セッション行い、その前後で、生徒の絆の変化を検討した。セッションの前後で情緒的絆得点は有意に増加していた($t(1)=2.46, p<.05$, Figure 1)。次に、絆得点で生徒を高群、低群に分け3セッションの前後で比較したのがFigure2である。分散分析の結果、スコア高群がセッション前後で有意に絆得点が増加したことが示されている。他の尺度についてもほぼ同様の結果が示された

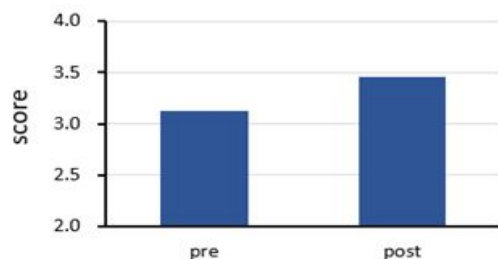


Figure 3 介入前後のクラスの絆認知スコアの比較

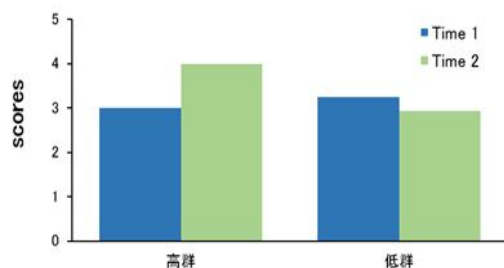


Figure 4 介入前後の情緒的サポート認知への効果(高群・低群比較)

(3) 2 高校における絆づくりの支援

次に高校におけるさまざまな援助ニーズを有する生徒への大学院生による生徒支援を実施した。参加した学生は教育、臨床、教育相談等に関心のある学生で一定期間等を踏まえ、参加学生は年ごとに入れ替わりながら支援は4年間続けられた。

学生の生徒との絆づくりの支援および学校生活支援の活動は、生徒の学校適応に変化をもたらした、同時に、学校関係者、生徒と関わ

る教師の変化、学生と教師との関わりをもたらし、学校全体の変化、支援する学生自身の変化にもつながっていった。

学生と生徒との関わりにおける絆づくり、生徒の変化は小さな取り組みではあるが、相談室を訪れた生徒の記録とカンファレンスから、学校における対人関係にさまざまな傷つき体験を有する生徒、人との関わりに極めて消極的な生徒、対人関係が不安定な生徒、家族関係に悩む生徒や十分な世話や配慮が得られない生徒、などに特に効果をもたらすと考えられた。また教室に居場所がない生徒にとって学生のいる相談室は生徒が安心して

いられる場所になっていた。

学生による絆作りと学校生活支援によって生徒は学生とのつながりを実感でき、そこでの「安心」と「安全」、「居場所」としての空間が確保されたと考えられる。さらにその場所に行き、学生と関わることによって、生徒は、教室空間や学校生活、学習、将来の自分を考える「元気」を得られる場所として機能したと考えられた。

(4) 支援と絆形成モデルの提示

本研究を通して生徒との絆作りにおける生徒へのサポートは、以下の階層的サポートモデルによって実施された(Figure 5)。

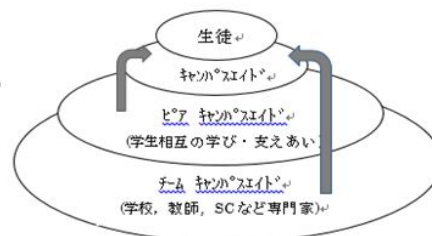


Figure 5 生徒を支える階層的チーム支援

(キール・サイト: 生徒の学校生活を支える学生)

生徒への支援において学校の組織風土や文化の影響抜きに生徒の変化、支援者と教師の連携は考えられない。よって社会的絆づくりの仮説修正モデルとしてFigure 6を示す。

高校進学率がほぼ100%になるとうる現代、保育所・幼稚園、小学校から高校まで多様な援助ニーズを有する生徒が存在するようになっている。生徒を支える家庭も多様化が進んでおり、学校では一人ひとりのニーズに配慮した教育が今後ますます求められる。本研究における絆づくりの実践は、より多くの学校で必要とされるであろう。

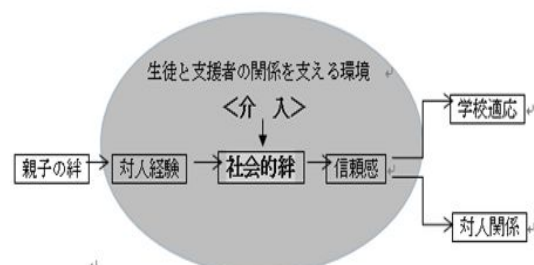


Figure 6 本研究における仮説修正モデル

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 20 件)

江角周子・庄司一子、中学生における聴くことの学びを通した聴く行動の変容プロセスの検討、教育心理学研究、査読有、64 巻、2016、268 - 280.

新井 雅・庄司一子、スクールカウンセラーと教師のアセスメントの共有方略が協働的援助に及ぼす影響、心理臨床学研究、査読有、34 巻、2016、257 - 268.

江角周子・庄司一子、中学校でのピアサポート実践におけるサポーターへの効果(2): サポート概念の学習を通して、共生教育学研究、査読無、5 巻、2016、15 - 26.

新井 雅・庄司一子、共生社会および共生教育の展開における心理学研究の貢献可能性の検討、共生教育学研究、査読無、5 巻、2016、37 - 52.

飯田順子・石隈利紀、中学生の学校生活スキルが学校適応・問題傾向に与える影響: 情動喚起反応を加えたモデルの検討、筑波大学心理学研究、査読有、51 巻、2016、97 - 105.

石隈利紀、共生社会をめざしたインクルーシブ教育の実践: 学校心理学の視点から、日本教育、査読無、458 巻、2016、14 - 17.

中井大介、中学生の友人に対する信頼感と学校適応との関連、パーソナリティ研究、査読有、25 巻、2016、10 - 25.

中井大介、学校心理学に関する研究の動向と課題 生態学的システム理論から見た学校心理学、教育心理学年報、査読有、55 巻、2016、133 - 147.

岡崎慎治・青木真純、発達障害に対する教育と社会的サポート、Psychiatry、査読無、29 巻、2016、419 - 424.

新井 雅・庄司一子、心理専門職と教師によるアセスメントの共有方略に関する探索的検討 - 協働的援助への示唆 -、筑波大学発達臨床心理学研究、査読無、26 巻、2015、17 - 26.

江角周子・庄司一子、中学生における聴くことの意味の検討、発達臨床心理学研究、査読無、26 巻、2015、27 - 37.

崔 玉芬・庄司一子、中学生の自己制御が攻撃性に及ぼす影響、発達臨床心理学研究、査読無、26 巻、2015、11 - 16.

石隈利紀、学校現場におけるチームによる心理教育的援助サービス、臨床心理学、査読有、15 巻、2015、186 - 192.

新井 雅・庄司一子、心理専門職によるアセスメントのプロセスに関する展望 - 児童・青年期の臨床事例を中心に -、カウンセリング研究、査読有、47 巻、2014、11 - 19.

新井 雅・庄司一子、臨床心理士、教師、養護教諭によるアセスメントの特徴の比較

に関する研究、心理臨床学研究、査読有、32 巻、2014、215 - 226.

新井 雅・庄司一子、学校支援ボランティアの役割と課題 中学校での実践事例を通して 発達臨床心理学研究、査読無、25 巻、2014、1 - 10.

江角周子・庄司一子、よい「聴き手」とは Bodie らの一連の研究を中心に 発達臨床心理学研究、査読無、25 巻、2014、33 - 38.

庄司一子・簡 浚祐・崔 玉芬・山田有芸・新井 雅・江角周子、「モノ」の意味に関する研究、発達臨床心理学研究、査読無、25 巻、2014、39 - 48.

村松 静・岡崎慎治、通常の学級における児童の認知処理過程を考慮した授業理路雨滴なインクルーシブ教育をめざして -、筑波大学特別支援教育研究、査読有、64 巻、2014、12 - 22.

中井大介、中学生の親に対する信頼感と学校適応感との関連、発達心理学研究、査読有、24 巻、2013、539 - 551.

[学会発表](計 20 件)

江角周子・庄司一子、大学院生による心理的支援活動が高校生の学校生活に及ぼす影響、日本教育心理学会第 58 回総会、2016.10.9、高松市(香川県)

Ichiko Shoji、Shuko Esumi、Yansong Wang & Tomoko Takahashi、How students learn to support high school students -Step hypothesis to develop student's supporting skills-、The 31st International Congress of Psychology、2016.7.29、横浜(神奈川県)

Esumi Shuko & Ichiko Shoji、Changes in the classroom atmosphere of a junior high school throughout a year、The 31th International Congress of Psychology、2016.7.28、横浜(神奈川県)

Yansong Wang & Ichiko Shoji、Chinese Junior High School Students' Reasons for School Attendance、38th International Annual Conference of the International School Psychology Association、2016.7.22、アムステルダム(オランダ)

Ichiko Shoji、Daisuke Nakai、Masaru Arai、Shuko Esumi & Yansong Wang、Development of Social Bond Scale for junior high school students、38th International Annual Conference of the International School Psychology Association、2016.7.22、アムステルダム(オランダ)

江角周子・庄司一子、中学校における相談相手の数・種類の違いに関する検討 学校への適応感、自己肯定感、仲間からのサポートに着目して 日本教育心理学会第 57 回総会、2015.8.27、新潟(新潟県)

王 巖崧・庄司一子、中学生の登校回避感情に関する検討：中国公立中学校を対象として 日本教育心理学会第 57 回総会、2015.8.27、新潟（新潟県）

江角周子・庄司一子、「中学校における予防教育実践を通じた生徒の変化 - 仲間間のサポートに着目して - 」日本学校心理学会第 17 回大会、2015.7.18、大阪（大阪府）

Masaru ARAI & Ichiko SHOJI、Relationship between sharing methods by school psychologist and teachers' case assessment and inter-professional collaboration. The 14th European Congress of Psychology. 2015.7.10、ミラノ（イタリア）

Shuko Esumi、 & Ichiko SHOJI、The effects of peer support training in junior high school students—Focusing on listening— The 14th European Congress of Psychology、2015.7.10、ミラノ（イタリア）

Ichiko Shoji、 & Masaru Arai、Social bonds among Japanese junior high school students、The 14th European Congress of Psychology、 University of Milano- Bicocca、2015.7.8、ミラノ（イタリア）

渡辺弥生・庄司一子・岩立京子、生涯発達を通じた予防教育 幼児期（幼児教育）から青年期（高等教育）まで、日本発達心理学会第 26 回大会、2015.3.23、東京

庄司一子・新井 雅・中井大介、青年における社会的絆の検討、日本発達心理学会第 26 回大会、2015.3.10、東京

江角周子・新井雅・鈴木悠介・長谷志津恵・庄司一子・石隈利紀、心理的支援活動を通じた大学院生の気づき（1） - 生徒理解、支援方法の変化に着目して - 日本教育心理学会第 56 回総会、2014.11.7、神戸（兵庫県）

鈴木悠介・長谷志津恵・江角周子・新井雅・庄司一子・石隈利紀、心理的支援活動を通じた大学院生の気づき（2） - 教師像の変容に着目して - 日本教育心理学会第 56 回総会、2014.11.7、神戸（兵庫県）

中井大介、過去の教師との関わり経験と教師関係への動機づけの関連、日本教育心理学会第 56 回総会、2014.11.7、神戸（兵庫県）

江角周子・庄司一子、中学校におけるピア・サポート研修の効果に関する量的・質的検討、日本学校心理学会第 16 回神奈川・東京大会、2014.9.7、東京

Shuko Esumi & Ichiko Shoji、The effect of experiencing mutual peer support in junior high school students —Focusing on listening— 36th Annual Conference of International School Psychology Association 、

2014.7.17、カウナス（リトアニア）

〔図書〕（計 4 件）

庄司一子、一藝社、子どもの虐待と母親支援、宮寺晃夫（編）「受難の子ども～いじめ・体罰・虐待～」、2015、126-143.

石隈利紀・庄司一子（編著）協同出版、「生徒指導とカウンセリング」、新教職教育講座第 4 巻、2014、全 323 頁.

庄司一子、協同出版、生徒指導とカウンセリングにおける予防教育、新教職教育講座第 4 巻、2014、299-320.

庄司一子 金子書房、家庭での人間関係・社会性発達の課題と支援(2)、長崎勤・森正樹・高橋千枝（編）「社会性発達支援のユニバーサルデザイン」第 3 章 2013、33-45.

6. 研究組織

(1)研究代表者

庄司 一子（SHOJI、Ichiko）

筑波大学・人間系・教授

研究者番号：4 0 2 0 6 2 6 4

(2)研究分担者

石隈 利紀（ISHIKUMA、Toshinori）

筑波大学・附属学校教育局・特命教授

研究者番号：5 0 2 3 2 2 7 8

中井 大介（NAKAI、Daisuke）

愛知教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：2 0 5 5 0 6 4 3

岡崎 慎治（OKAZAKI、Shinji）

筑波大学・人間系・准教授

研究者番号：4 0 3 3 4 0 2 3

都丸 けい子（TOMARU、Keiko）

聖徳大学・心理・福祉学部・講師

研究者番号：4 0 4 6 3 8 2 2

新井 雅（ARAI、Masaru）

健康科学大学・健康科学部・助教

研究者番号：8 0 7 5 0 7 0 2

（H27 から研究分担者として参画）

(3)研究協力者

新井 雅（ARAI、Masaru）（H25～H26）

江角 周子（ESUMI、Shuko）

王 巖崧（WANG、Yansong）